

自分が授業をする姿から
生徒に「努力するということ」を感じて欲しい



ゆうじ 小島裕治さん(27歳・西尾市)

4歳のときに、交通事故で両腕を失う。今年4月から、安城北中学校で非常勤講師として教壇に立つ。

ときに、ニュージールランドへ留学に行き、二週間の体験をしたことが教師を目指すきっかけになったんです。

留学中、現地の小学校で日本の文化を紹介する機会があり、自分は、足で画用紙に名前を書きました。その様子をじっくりと見つめる子どもたち。そして書き終わると歓声が…。そのとき初めて、自分が当たり前に行っていることは、他人にとってはすごいと感じることなんだと気づかれました。それから人に影響を与える仕事「教師」になれたらと思うようになったんです。

■障害を受け入れて

その後、縁あって、何度か県内小中学校で講演をする機会がありました。そこで話したことは、両手のない生活で今まで経験してきたこと、そして、他人に話せずに今まで生きてきたこと、それを話すうちに、苦しんでいたことから開放され、障害を受け入れることができたと思います。



講演後、生徒から「自分もがんばろうと思った」という主旨の感想文をもらいました。自分自身、これを読んで前向きな気持ちになりましたし、生徒の意識に変化を与えられたと感じました。この経験も教師を目指す気持ちをより強くしました。

■教壇に立つ

初めての授業は、生徒の反応を見る余裕がないほど緊張しました。そして、初日が終わり帰宅する途中で、教師として教壇に立てた喜びが込み上げてきました。

今は、英語の授業を受け持っています。教室で講演の内容のようなことを話すつもりはありません。自分が授業をする姿を「先生と生徒」だけではなく、「人間と人間」という視点から見たい。そこから、努力するというところを感じてもらえたらと思っています。

筆者のつぶやき

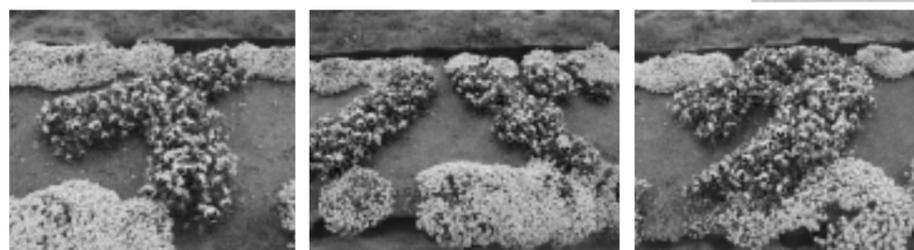
インタビューをしているときの小島さんは、笑みを絶やさず明るい顔。でも授業中は、真剣な教師の表情そのものでした。今は非常勤ですが、将来的には、常勤の教師を目指しているそうです。

いつか、自分に子どもができれば、小島先生が担任するクラスで教えてもらえたらなあ。ふと、そんなことを考えてしまいました。

あんじょうみあるき

その38

井畑



花の道



「ひとつぶの種から広がる・花の輪・人の和」

市内北部を流れる猿渡川にかかる井畑橋・足取橋の間の堤防に、「井畑花の道」があります。

数年前までは、この場所は雑草がはびこり、ごみが捨てられている場所でした。そんなあるとき、子どもが雑草の陰になり、交通事故に遭いそうになったのです。このことをきっかけに、地域で猿渡川をきれいにする活動が始まりました。

具体的な対策として、雑草を刈り、花壇を作りました。これにより見通しも良くなり、交通の安全も確保され、ごみもほとんど捨てられることがなくなりました。初めは花に関しては素人ばかり。慣れない作業に体を痛めることもありましたが、いろいろな人に指導を受け

うちにコツをつかみ、今では楽しんでやっています。

この花壇は、一年中きれいな花を咲かせています。でもその維持のために苦勞もあります。例えば冬に咲かせる花のために、早くから温度調整しながら苗を育てておくことや、サルビアは真夏に毎日の水やりが必要なことなど。ただ、見に来てくれた人の「きれいですね」の一言や、他市からの視察があると、「やってきて良かったなあ」と思いますね。



今月の案内人
かつひこ 村尾勝彦さん(里町)



長さ25m・幅2mの花壇が18個並んでいます。



「井畑花の道サークル」のみなさん

※4月29日に第19回あいち都市緑化フェアで井畑花の道サークルが「県都市緑化功労者」に選ばれました。